

## 想説 ハニーポット・Z a p a n

稲瀬 隆

◆以下はすべて空想の国々の近未来図である◆

## U 民国 (Republic of Urinar)

U 坐両国友好市民団 (朝府台)

辛子漬け魚介ののり巻を無造作に口に押し込んで、男は大きくゆっくり頷いた。

『これでよし。首都に続いて、国会も抑えた。』

TVは坐凡国・国会議員選挙の速報を流している。U国の息がかかった候補者たちが、党派を超えて次々と当確を出していた。今まさに“民主主義のルール”に則って、とある一国が他国を呑込もうとしている。

『もうこの国は我らが祖国に併合されたも同然。これを拒めば内戦になるしかない。今やすべてがわれわれのものだ。古来君臨する王族は、われらが源流だ。この国で「道」がつくすべての文化は元来我らがもの。この国の歴史をすべてへ改めてみせる。』

国会を抑えた彼らがまず着手するのは、U国を誹謗する者、いや、過去にした者さえすべてを検挙し、裁判もなぐ処罰できる“反人権処罰法”の制定だ。これは、かつての大戦後に某国で制定された“反・カギ十字法”を模したものだ。非人道組織のメンバーを、時効なく地の果てまで追いつめ、処罰できる究極の法だ。カギ十字党に虐待され

## &lt;小説&gt;

## &lt;想説 ハニーポット・Z a p a n &gt;

て亡くなった少女“ A の日記”が各所の公立図書館で引きちぎられてから、坐国は“反人権思想の国”との烙印を押されている。逮捕された容疑者は異国の氏名だったが、報道では伏せられた。戦時下で迫害された民族を助け、坐国で英雄視される外交官 S の書籍も同時に破られた矛盾、すなわち犯人が生粋の坐国人でありえない事実は、欧州には届かなかった。それ以前に、世界中に設置された《売春少女》の像が、坐国の品位を貶めていたからである。

反人権処罰法で設置される人権侵害審査委員会は、民間からの通報に基づいて独自の捜査権限で被疑者を捕捉し、尋問し、その基本的人権をあまねく制限できる。その権限は三権分立の鼎を超える。その裁断は司法の制約を受けず、現代法理の基本原則さえも超えて、適及的に効力を持つ。しかもその執行は“国家機密保持法”と“個人情報守秘法”を盾として、すべて委員会にゆだねられる。究極の権限だ。世界で唯一、特定の国を対象とした“反坐国法”を持つU国の発想である。

都心の高層マンション最上階に、市民団のオフィスはあった。中年から初老の男女十数名が、大画面に向かって氣勢を上げ、グラスを交わしている。その中で一人、白髪も薄くなった男だけが、TVから遠い朱色のソファで静か

にビールを飲んでいる。スシで汚れた指先をウェットティシューでぬぐい、その眼は遠く、外の景色を眺めている。

「長い道のりだった。。。」

この国では長い屈辱の日々を強いられた。前世紀の半ば、この国、坐国は男の祖国を呑込んだ。それ以前は隣の大国V国の属国として領土を仰ぎ、一握りの貴族が武力と思想で社会を治める国だった。実学が蔑視され、社会を支える大多数の工・商・農民は虐げられ、卑しめられて、隷属させられる治世であった。赤貧にあえぐ庶民にとってお世辞にも素晴らしい国ではなかったが、それでも統一王朝のもとでは多くの血が流されることは稀だった。坐国はそれを丸飲みにした。ほんの一部の反貴族派、親坐派を抱き込んで乗っ取りを謀り、“保護国”としたのだ。インフラが整備され、社会環境は少しはましになった。だが民衆は以前と変わらぬ二重の搾取を受け続け、挙句に大戦に引きずり込まれることになった。

男は、壁にかかった、20枚をこえる古ぼけた肖像を、ひとつひとつ見つめ直した。

端から3枚目は、協会初期の功労者。プロレス界で坐国中の人気を集めたヒーローだった。

坐国が先の大戦で負けたのちU国は、戦勝国、敗戦国の

いずれでもない第三国となった。戦前の併合が無効とされたのだ。ただ、差別は逆に厳しくなった。本名での生活は困難を極め、通名を使ってさえ社会の底辺で生きるのに必死だった。そんな中で一握りの者は、闇の物流や金融界で小さな勢力を作った。とくにU国自体が東西2大国代理の戦場となった半島戦争では、特異な立場が利用できた。だがV国人のように世界的展開の歴史がなく、ネットワーク作りが苦手なU国人たちは、なかなか自分たちの基盤を築けなかった。

『感謝いたします。』

男は肖像を見上げ、左の肩をさすりながらつぶやいた。背広の下には、格闘技と刃物沙汰で幾度も傷つけられた体があった。

「会長、なにかおっしゃいましたか」

一人の若い男が片膝をついて老人の視線を伺い、右手に左手を添えてビールを注ぎ足した。

「いや・・・昔を思い出していた。私が君くらいの頃は大変だった。どこもまともに雇ってくれなかった。父親は日雇い、母親はくず拾いと内職で、おれを大学まで出してくれたのに、だ。今じゃ考えられんだろう？」

若い男は微笑みながら頷いた。

「はい。私がTV局に入社したとき、両親がとても驚きました。」

野球、プロレス、ボクシング。それらを一気に全国民の娯楽にのし上げたのがTVだった。とくにプロレスは、白人のヒール(悪役)を配し、坐国民が大好きな逆転勝利のシナリオで、敗戦国を熱狂させた。坐人風の名前で通すことが求められはしたが、ボクシング、歌謡・芸能界など実力本位の世界では、出自、経歴はあまり問われなかった。差別は酷かったものの、今ほどに個人情報筒抜けになる時代でなかったのは、幸いだった。

「いまではマスコミ関係への就職は、堅いそうだね。」

「はい。三尊電子や富大自動車からの推薦があれば力強いです。芸能プロも、TVには強いですから。」

「懐かしいね。我が同胞が年末歌合戦の出場者の半数を超えたのは、もう20年も昔だ・・・」

「今やこの国では、我が国の力なしにニュースも配信できません。」

「ほう。」

「電話会社から通信社までわが同胞ですし、大手放送局もわが国の制作会社の協力なしに番組はできませんから。」

「それで朝ドラに出てくる車にまで、富大自動車が使われ

るようになったのか」

「大手広告社の大通もツジテレビも、われらの力なしには動けません。まあ、調子に乗りすぎて、原爆記念日のドラマでLittle BoyのTシャツを着せたり、スポーツ番組で我らが“妹”のライバルを失敗シーンで茶化したり、ちよつとやりすぎもありますが・・」

会長と呼ばれた男は、ナース似の表情になった。

「我々が静かな“併合”を進めようとしているのに、あまり騒がれるのは迷惑だな。まあこの国では、経済とマスコミを抑えれば、すべて思うがままだが。民衆は国家意識が希薄で、政治への参加意欲もない。国は自分たちに、何かしてくれるもの、何とかしろと要求する相手、くらいにしか考えていない。我々には、幸いなことだがね。そして今、彼らは我らのしもべとなる・・」

「次の世界戦略は、V国の議員に、我が方の味方をもっともつと増やすことですね」

「それは大丈夫。わが国はおなじキリスト教国だし、おまけにわが国には現代のキリストが3人もいるじゃないか」

青年と会長は大笑いした。

万家通商代表部公邸(阿佐府)

壁面一杯に並んだモニター画面に、各局の選挙速報が映し出されている。

「この国に百年の計など、無いな。」

建設途中で投げ出されたマンションやホテルを眼下に見やっつて、頬の弛んだ初老の男が薄笑いと言う。頬に短く伸びた白ひげが、真っ黒に染めた髪の不自然さを際立たせる。

「オリンピックの首都開催を支持してやったのは、まさに十年殺しの秘孔の中だったな。恩を売りつつ、この連中の国力も大きく削ぎ落せた。」

男はぶつ、とナツメの種を吹き出した。

「国民はみな、雰囲気だけで国のかじ取りを決めている。ローマの政治が、パンとサーカスの怠惰に埋れたようになる。平均寿命が八十歳を超えているというのに、せいぜい一世代、二、三十年先までのビジョンしか持っていない。パッと咲き、パッと散る。この国の美学かね。まあその短期計画でさえ行政レベルでは、伸ばしのばしにされるがね。」

両の腕を後ろ手に組み、ソファの方に向き直った。

真っ赤なソファには、黒縁メガネ男が座っていた。まだ三十歳くらいだろう。

初老の男が続けた。

「欧州でも我が国でも、家は石づくりだ。百年、二百年の街並みが保たれ、中流以上の階級は別荘と余暇に金を使う。だがこの国では世代ごとに家を建てる。人生最大の目標が家一軒だ。だから社会に蓄えがない。古くなるとすぐ壊される。そのせいか、いやそうでなくても、かな、坐人は貯蓄が好きだ。自己防衛のつもりかもしれないが、今やそれも実質、空っぽだ。もう3世代先の財布まで空にしているんだからな。」

用心棒とおぼしきの背の高い男が、大きな机の前にある黒い背もたれ椅子をひき、男を座らせた。

「どうしてカルタゴが減んだか、知っているかね。」

男は試すように、メガネの男に質問を投げた。

「さあ・興味ないなあ」

一瞬、痛に障ったか、長身がメガネを睨んだ。

「ふん。君の仕事にも関係があることだがね・・」

「それ、金になるんですか」

「君の心がけ、興味とアイディア次第だね。この国の秘密はなにもかも、“保護法”のお陰で値が上がった。君も随分おいしい想いをしたんじゃないかね。まあ、君たちが抜き取ったロケットの設計図や、敵国大使館の協力者名簿は

格別な情報だったが。だがこれからは、そんな小さな果実をひとつひとつ摘むのではなく、この国の密を根こそぎいただく計画に移行するんだ。」

「じゃ、お聞きしましょう」

「紀元前に地中海をわが物にして商業で栄えたカルタゴは、ことごとくギリシャやローマと敵対していた。とくにシチリア島を巡ってはローマと百年にもおよぶ戦争を繰り返した。」

「聞いたことがある話だな」

「ローマ帝国は激しくカルタゴを恨んだ。一度はイタリア半島深くまで攻め入られ、首都ローマも陥落寸前まで追い詰められたからな。そこで政治家は市民の嫌悪感と憎しみを募らせ、国中に反カルタゴの思想を埋め込むことにした。ネガティブ・キャンペーンだ。例えば、カルタゴでは幼児を生贄として邪神に捧げている、とな。今ではこれは事実の歪曲、デマだったといわれている。そう、かつての大戦でこの坐国が同盟を結んだ国の洗脳者は、ウソも百べん言えば真実になる、真実は国家の敵だ、とまで言ったそうだが、歴史というのは、そういうものだ。」

メガネは口を閉じたまま、小さい欠伸をした。

「加えて、反カルタゴの急先鋒だった執政官、ケンソリウ

スという男に至っては、議会での演説のたびに必ず、『それにしても、カルタゴは滅ぶべきである』と締めくくったそう。むろん、なんの脈絡もなしに、だ。こうしたことが功を奏して、いや、効きすぎてかな、第三次ポエニ戦争でカルタゴ市民は四分の三が虐殺され、残りは奴隷として売り払われた。土地には二度と草木が生えんように、たっぷり塩まで撒かれたというから、念の入ったことだ。」

「はあ。。。。でも、反坐教育のことなら、我々はもう十分に受けてますよ。この国の連中だつてよく知ってることだけ。」

「そうだ。だが、そこが問題だ。われわれの反坐政策は、あまり突出しては困るのだよ。」

「いまさら？」

「国際的に反坐政策が目立つべきは、U国だ。そうだろう。」

「ふつ。わかりません。鷲と蛤、つてことかな。」

「さすがだな。そう、U国と坐国、この二つの小国は、つねにいがみ合っていないければならん。われわれは、両者とともに呑込む龍なのだから。」

「では、反坐と反Uの両市民グループへのテコ入れと、関連の放送局や新聞社への浸透を強化しましょう。」

「両者にはもつと“油”をくべてやらんと。ついでにX合州国離反工作もだ。商工業銀行経由でやるといい。それも君に任せよう。これはあくまで私個人と君の契約だ。微かな、微かなかな。すべては敵の知らぬ間に。webの世界はまさに無形の至りだな。ふおっふおっ」

「お話しが終わりなら、今日はこれで。企画書、見積もりは「週間後」では。」

メガネは、軽く会釈をすると、振り返りもせずに部屋を出て行った。

「まったく無礼な男です」

側近が漏らしたことばに、くぐもつた声が返した。

「まあいい。赤いネコでも、白いネコでも、金を招くのは良いネコだ。」

二人が振り返ると、壁面のTVが一般ニュースに変わっており、東の小島を坐国の保安船が巡視している様子が映し出された。男はこぶしを握った。

「これは我が国の確信的領土だ。要石は断固奪取する。」

「要石と？」

「君は囲碁をやるかね。」

「いえ、やりません」

「やってみるといい。あれは老人の遊びではないぞ。遠くを見据えた一手の重さがわかる、修行だ。この島がこの大洋を呑込む大きな布石だと、分かってくる。」

「呑込む・・・」

「この小島はこの列島、我らが大海への航路を塞ぐ障壁を、一挙に壊すための螻蛄の一穴だ。そこを支点に、海龍王国を復活させて再び我らが属国とする。X国の基地を追い出し、この障壁を打ち壊して、われらの防壁に再構築するのだ。」

「明白です。」

「それだけではないぞ。この国は、陸地面積こそ世界の40位ほどだが、EEZ、排他的経済水域はトップ10に入る広さだ。しかもあちこちに黒鉱鉱床がある。この地下では3つの地殻プレートがぶつかり合い、割れ目に噴き出した火山が地底から金、銀、レアアースを押し上げた。おまけに深い海溝には燃料資源まで溜め込まれているんだ。この国の馬鹿どもは目先の損得でしかことを運ばん。だがこの列島は、本当は宝の島だ。これを開発するのだ。住民など一人もいらん。いない方がやりやすい。人間なら我が国にあふれているからな。この島々を手に入れ、盾とし、弓にして、海の向こうに矢を射る構図を考えてみたまえ。」

わくわくするだろう。」

「一様の想いです」

「この国はかつて我が国を蹂躪した。何万人も、何十万人も、いや何億人も人民が犠牲になったと言ってもよいだろう。この国の右翼どもは、我が国の改革運動で何百万人も死んだと言いたてる。だがそれは我ら身内の問題だ。我が国四千年の歴史は連続ではない。すべての王朝が適切に過去を掃除してきた。だから成り立っているんだ。他人が口を出す問題ではない。家族なら叩かれても許せるが、他人が叩けば犯罪だ。殴った方は忘れても、殴られた方は忘れないぞ。だからこそ、坐国は滅ぶべきなのだ。」

### W連邦国 (Warsaw Federation)

W国駐坐大使館 (狸沢)

TVでは、議会2/3の議席を獲得した与党の勝利宣言と、惨敗した野党の懺悔が流されている。

精悍な顔立ちの男が、画面を背に、窓の外を眺めている。眼下には首都の街並みが見える。林立するマンションの窓に明かりはなく、暗闇にうねる高速道は付け替え工事が止まったままだ。オリンピックに向けた財政は破綻した。そもそも敗戦後二十余年、再生坐国の青年期に開催された

男は口に出した。

「まだまだ、この国は美味しい。熊が大好きな、ミツバチの巣だ」

水滴を纏ったグラスの中の琥珀色の液体を、ゆっくり流し込む。

「この国は、我が帝国が破れた唯一の喧嘩相手だからな。歴史上の汚点となったこの“借り”は、絶対、どこかでしっかり返す。大戦直後の極寒地開拓やいくつかの小島くらいでは済まんぞ。」

「入り賜え」

目つきの鋭い若い男が入ってきて敬礼し、短い報告事項を伝えた。

「ごころう。だが今はとくに任務時間外だ。そろそろ自分の部屋にもどろうと思っていたところだ。どうだ、君ももう帰るところなら、一杯。市販のだが、なかなかうまいミエダポーハ(はち密酒)なんだ。」

「有り難うございます、少佐」

「君は2年目だな、ここにきて。どうだ、この国の住人は」

「は。国で聞いていたのとは随分違うように思います。」

オリンピックの成功と栄光を、戦後七十歳のこの国が再現しようとするのは、土台ムリだった。かつては道路も、鉄道も、上下水道、公共施設、人々の意識、何もかもが新しく、若かった。しかしこの都市はその後、新規、増設、拡充には励んだが、保守、更新には無頓着のまま年を重ねた。にもかかわらず「あの夢をもう一度」と叫んだ暴走政治家に、目先の利益を求めた業界、無定見な市民が併走した。厳しい現実に向き合ったライバル都市が次々と脱落する中、市民の8割が開催支持という社会調査のウソもあって、開催が決まった。十年足らず前にこの国を襲った、未曾有の巨大地震からの復興も遠いままに、である。

男は、ショットグラスを手にした。

国全体が疲弊しながら、首都の財政だけが金余りを起こしていた歪みの醜さが、透けて見えた。これも地方分権なのか。建築資材は高騰し、人手は都心インフラの再アレンジに廻されて、北部の被災地、放射能汚染地帯は完全にうち捨てられた。これはまるで正常な判断力と感覚を失った老人が、体の一部を壊して失いかけていることに気付かない、そんな状況だ。かつて世界第2位の経済力を誇った国が今、急速に腐り始めている。そう思えた。

「だが、」

「ほう？」

若い男は、こう説明した。

百年前に闘った坐人も、先の大戦で闘った坐人も、質素で我慢強く、自己の犠牲を厭わなかった、そういう民族だ、と聞いた。それがマンガやアニメ、ゲーム、アイドルといった文化と、なかなか結びつかなかった。だがここに赴任して分かった。民族や文化の本質がすでに“変身”してしまっていたのだ、と。

「なるほど・・・だがどうだろう。装備も体もボロボロになつてなお果敢に襲ってきた彼らと、なにも将来を考えない、選挙にすら行かない国民は、本質的に同じではないか。方向を決めてやれば思考を停止させて突き進む、オートマトンのような民族性なのではないか。」

「確かに、そうとも言えます。」

「簡単に、同調してくれるね。口に出すと危ないことは、みな“自粛”する。それは昔、我が国人民に染み込んだ生き様だったからな。だがその症状はどうかやら、自由にももの言えるはずのこの国でも、広まっているように思えるね。」

「“お上”が決めれば、万事従う、ということですか」

「そう、上を抑えれば言いなりになる。この国は北極の天

然ガスを買ってくれる大事な顧客だ。たしかにシェールガ

スのせいでガスの国際価格は暴落した。だが、シェールガスを海の向こうから運ばねばならんこの国にはまだまだ、天然ガスは高値で売れる。パイプラインを作れば大幅なコストダウンになるが、それを基幹産業に直結させれば、この国の命脈を握ったに等しい。思考を停止して働くロボットのたちを全て、配下におけるのだから、一石二鳥。いや、V国やX国との大洋支配権争いを考えれば、三鳥にも、四鳥にもなる。とにかく美味しい国だよ、この国は」。

### X合州国 (Federated States of Xristos)

X国駐坐領事館 (朱鷺坂)

選挙の大勢が決まった。翼賛体制だ。

ニュースの画面は、深海魚が各地で揚がっている話題に変わっていた。

総領事はワイングラスをカクテル・テーブルに置いて、TVを切った。いくつかの皿にはまだカナッペやチキンロールが残っている。

「近い将来、沖乃輪諸島のレッドラインどころか、五豆諸島の端が大洋権益の生命線になるかもしれんな。大きな声じゃ言えんが。」

ひとつ深く息を吸って、領事は尋ねた。

「君はその、シー・アーチンは好きかね。」

書記官が答えた。

「ぼくは慣れました、ウニはスシネタでは高級品ですし。われわれは、先住民も誰も、北方の湾に沈んでるイガグリなんか、割って食べようなんて思いませんでしたけどね。」

「私は今でもどうも好きになれんね、そのぺたつとした感触。なんといってもアーチン（ハリネズミ、汚い悪ガキ）だからね。今、我が国の沿岸で、海底の砂漠化を起こしてる犯人だそうさ。まさに悪ガキだな」

「そう言えばその昔、この国の首相が我が連邦議会で防衛ビジョンを語った時、通訳が“ハリネズミ”を“マウス”と訳して、物議を醸したそうすね」

領事がゆっくり頷く。

「そう、逃げ回る小ネズミのイメージ。ペナム戦争でU国は勇猛で残虐な軍を送ってきたが、この国は地上軍どころか護衛艦一隻、送ってこなかったからな。議会での評判は悪かった。そして今、ビジョンの乏しい防衛力と情緒的外交の帰結として、内なるU国に乗っ取られることになった。奴隷の子孫でも大統領になれる国というのは分けが違う

ぞ。ま、怨の根深いU国にはとても勝てまいな・・・」

「皮肉ですね。今ではそのU国自身のイメージも、別の意味でアーチンだ。どの会議でも否定されるとすぐムキに棘を出す。逆に、賞賛や榮譽には飛びついて、すべて自分が元祖だ、身内だと言いつのる。敬遠されたり、嗤われたり。ネタ作りですかね？」

「キリストやV国の思想家、高師までもが我が民族だと言ってる、とかね。印刷技術も自分たちの発明と言わんばかりだ。以前に流行ったオリガミも自国が元祖だと言いつのる。それは紙の発明以前のことだった。茶の湯や唐辛子伝来の歴史も創作して映画にし、海外の映画祭に出したそうさ。坐国やV国のネット族が嗤うのも分かんではないな。あ、だがね、伊国のピザの起源を奪ったはなし。あれはジョークだからね。」

「え、そうだったんですか？」

「信じてたのか？」

領事は愉快そうに笑って、話を続けた。

「高師の件はともかく、U国はV国に接近中だ。V国はV国で格言通り、へ溺れた犬は棒で叩くと、坐国の小島を巡りW国へ相互承認を働きかけている。今、坐国は孤立状態だ。これはまずい。U国と坐国はどちらも、赤い独裁国へ

の構えとして重要が同盟国だ。だがU国にはご丁寧に“反坐法”まであって、親坐派を取り締め、U系坐人にまで容赦がない。すさまじい執念だよ。グローバルに見れば、これほど似たもの同士の国は珍しいんだがね。」

「骨肉の争い、というやつですかね」

書記官は次のワインを開けるか躊躇い、総領事のグラスを見やって、クーラーに戻した。

「V国と坐国の間も冷え込んでいますね。」

「冷え込むのは、変に熱くなるよりましだろう？ V国は我が国にとって大事な大国だ。彼らが我が国の国債を買い、その金で我らが彼らの品物を買う。互いに銃を向け合っている、利害は一致している。これは好き嫌いではなく、国益だ。フットボールのチームのように、激しく対決はするが、世界の中では互いが必要なプレイヤーなんだ。」

書記官がその先を継ごうとしたが、領事は話題を変えた。「しかし、この国の外交は、どうにも“子ども”だ。自己主張を強硬に言い立てたかと思うと、別の要因でいとも簡単にボキリと折れる。交渉というものが分かっていないのだろう。議論のすべてが議場だけですむと思っっているらしい。ランチも付き合わず、講義だけ出て、さっさと帰るクルスマイトのようなもんだ。」

「結果だけに興味がある、ってことなんですか。そういうえば、この国の重要な試験はすべて〇×だそうですからね。」

「その昔、ペリエ提督が蒸気船でこの国に来たとき、いみじくも書き記していたが、この国では確たる責任者、責任機関がない。だからいくらフレンドリーに対応しても、交渉では一向に埒があかない、とね。ペリエの前任のピツルは、坐国の面子を立てて対等の立場で交渉に臨み、失敗した。大事なことは強硬に、高圧的に押し通すのが肝心だとペリエは書いている。」

「深い洞察ですね。」

「他にも彼はこんなことを書いている。『この国の住人は勤勉で・好奇心が強く、器用である。いずれモノ造りで先進国を脅かすだろう』とね。」

「それは、三十年前の貿易摩擦時代を予言したものですね。おどろいたな」

「その頃から坐人は、政府のさまざまな規制の中でも、いろいろ工夫を凝らしていたらしい。たしかにこの国の連中は面白いことを次々と考え出す。光ファイバー、パソコンのCPU、ビデオゲームにアンドロイド・・・。だがパテントなどのマネージメントはからきし、だ。だからロボッ

ト技術は丸ごと買った。S T A K細胞とかの技術は潰して、こちらが抑えた。戦略的でダイナミックに動く能力がないからな。決まりきった事務処理が得意な連中が、万事を仕切る国だ。お上が定めた枠の中で生きる。それが常道ってことだな・・・」

「滅私奉公、死ぬまで働く、はこの国民の習性なんですよ。ね。リーダーは育たない。。。」

「いや、リーダーは育てない、合議でみんなが決め、責任は曖昧にする、そういう文化だ。そのむかし農民一揆の時は役所への訴状には首謀者を曖昧にするため、傘の骨のように名を放射状に連ねたそう。ばれない工夫。たいした才能だ。だからこの国で起業し、成功するのは外国人やアウトローが多い。引つ張るより、引つ張られるのが好きな国民なんだな。」

「引つ張られる方がラク。なんだか甘えの構造が見えますね。」

「まあ、我が国の失業対策である軍隊を、秘密の“思いやり”も含めて、経済的に支えてくれる“友好国”だ。せいぜい大事にして、しっかりと働いてもらわないとな。対等なおトモダチを演じるのは、少々骨が折れるがね」

#### Y 民国 (Republic of Yushang)

玉山経済文化弁事処 (白金山)

書記官はリモコンでTVを消し、ゆっくり立ち上がった。清酒を入れた酒器は、もう空だった。サイドキャビネットの上に飾った、留学中の娘と、隣で微笑む妻の写真を、手にとって見た。自宅代わりのホテルは、どんなに快適で清潔でも、やはり味気ない。

都心の夜景に目を移した。遠く輝く月が、思いの外きれいに見える。

この国は今、まさに飲み込まれようとしている。かつて我が祖国を飲み込んだ“この国”が、だ。喜びはない。一つには、国際舞台で主役級の数少ないへ生きた外交チャンネルが疎遠になる危惧がある。だがそれ以上に、旧知の仲が離れてゆく、不思議な感覚もある。われわれがこの国を憎めないのは、同じ島国として常に大陸からの脅威に曝され続けてきたからだろうか。それとも統治下でさえU国人ほどに疎まれ、差別され、蔑まれた記憶がないからだろうか。

かつて坐国が敗戦国となった時、後のY国将軍は坐軍の捕虜たちを放免した。坐国の老人には今でも、寛大な将軍の国として我が国への親しみを口にする者があるという。

何とも皮肉なはなしだ。なぜなら、坐国を許した將軍たちはその後、大陸を追われて我が国土に上陸し、島民を虐待、抑圧したのだ。だがこの国ではそうした圧政はあまり知られていない。戦後、坐国の野球界では。我が国の逸材が本名のままスーパースターとなり、今も広く愛されている。他方で当時のU国選手たちは能力にかかわらず通名を強いられた。そのしこりが残る。

Y国にも坐国への親近感を持つ者は多い。かつて諸国に継いで3番目の統治者となった坐国が、教育、建設、開発に熱心で、危惧されたより“まし”だったことがあるのだろう。坐人を多数殺した抵抗軍さえも、大多数が死刑を免れたりした。長年、友好を謳いながら、さっさと頭越しに大陸と好を通じた大国、X国との対比もあるかもしれない。坐国が大震災に襲われた時も、国民の間から莫大な寄付が自然と集まった。長年来の大事な隣人なのだ。それが両国の絆というものだ。

なぜU国の人々が、あれほどに執念深く恨みを吐き続けるのか分からない。アジアの諸国やその宗主国だった欧州の国々は、いずれもが国民と元首の謝罪を受け入れた。だがU国だけは未来永劫、許しそうもない。まるでそれが国家のアイデンティティーであるかのように。とくに今の

若い世代がネット上でぶつけ合う憎しみには、嫌悪感さえ覚える。成分(氏・素性)が悪い人間は生涯、自由を許されない隷属の民とする。これがU国の分身である、北U国の国家観だ。生まれて来る人間は、氏も民族も国家も選べない。そこで生まれた者は一生“業”を背負え、という思想なのだろうか。南北を貫く、“恨み”文化の禍々しさを感ぜずには居られない。元来おおらかな我々にはきつと、理解できない歴史の闇の深さなのだ。しかし、  
「それにしても」と書記官は思った。

「ご都合大国や嘘つき大国に囲まれるこの国はごまかしの国だ。これまでは臭いものに蓋をしながら何とか乗り切ってきた。根底的に危機感が乏しく、外交的な対応がいつも甘かった。U国に抑えられた後も、パートナーたりうるのだろうか」

### 坐国 (Z a p a n)

坐国首相官邸(中田町)

選挙の大勢が決し、首相会見の準備が進んでいた。

各局のTVカメラがセットされ、記者たちが席に着こうとした時だった。

ド・ス・ン・

皆の体が十センチほど持ち上げられ、座席や床に叩き付けられた。

バラバラ・ガシャガシャ 大きな音がする中で、照明が消えた。

『今ならまだ通じる。』と、揺れるさ中に携帯電話をかける強者が何人も居た。

「このラインを切るな。かけ続ける。」 怒鳴り声が聞こえた。

揺れは続き、大型TVカメラが滑り、ぶつかり、倒れる音がした。椅子の下にもぐった何人かが、ワンセグTVに接続した。生番組のスタジオは大混乱だ。

およそ四十秒後、手回しよくシンブルなセットの中で、ヘルメット姿のアウンサーが叫んでいる局があった。

「ただ今、首都に直下型地震がありました。ただ今、首都に直下型地震がありました。まだ揺れています。まだ揺れています。」

おおよそ一分半ほどで、激しい揺れがおさまった。記者会見場は非常用電源が作動し、明かりはすぐ点いた。だが大画面のTVモニターは映らない。アンテナケーブルが破損したのだろうか。生き残っているラインを辿って、スマホやパッドPCにはそのカメラ映像が、流れた。ワン

セグの画面には、定点カメラの映像や、ネット上の映像が断片的に写し出され、ツイットが画面下に流れ始めた。

〈キター！！／(\*O\*)〉

〈やばくね？〉

〈坐国、終了のお知らせ・w w . . . 〉

誰かがどなる。「こんなの流してる場合か。情報しぼれ！」

6分後、官房長官緊急会見の準備ができた。正常な機器をよせ集め、電源保全のため、中継ラインは公営放送1本に絞り、他局はシェア画像。送受信は衛星経由が生きているが、ネットTVはウエブがオーバードロードで動画が滞る。

「・・・・・・この災害派遣要請に基づいて、国防軍が出動しました。X国もこれに連動して首都圏の基地を拠点にフレンド作戦を展開します。・・・・・・」

各局が会見を流しはじめた、その時に、公営放送のワンセグ画面が乱れ、衛星画面とちがう「緊急ニュース」の文字が現れた。イヤフォンで聞いていた一人の記者が、驚いてコードを引き抜き、スピーカーに切り替えた。

小さな、しかし、よく通る女性の声が繰り返し流れ、他局を見ている者も皆、それに気づきはじめた。

「緊急ニュースを申し上げます。本日〇時〇分、首都の直下で大地震が発生。首都圏は壊滅いたしました。壊滅状態です。周辺の原子力関連施設にも甚大な被害が出ています。もう一度申し上げます。本日・・・」

「ただ今、中央第一原発の定点カメラから、原子炉建屋損壊の映像が入りました。ご覧ください。」

「なんだこれは！ この発表だ」

「これは本物なのか。合成じゃないのか。すぐ調べろ！」

他の記者たちもチャンネルを変えた。緊急ニュースをさげぶ声が、あちこちから聞こえる。

「不安から暴動が起きています。西部地域の商店街で、略奪と暴動が起きています。」

一人の記者が異常に気づく。画面のテロップ。

誰かが、うそだ！と叫んだ。西部にこんな街並みはない、と。だが画面は暴動を流し続けた。

「この文字、へんじやないか？ このフォント！！」

各局は競って、web経由の情報を書き始めた。

「ハッキングだ！」

「Y国から緊急災害救助隊派遣の打診がありました。」

画面が再び乱れ、日ごろ見慣れたアナウンサーがひきつった表情で現れた。

「X国より災害支援輸送機二十機の、国防軍首都圏基地への食料・援助物資投下の申し入れがありました」

「ただ今、放送に障害が発生しています。今はどうか、私の顔と、この声をする画面だけが当局からの正規の放送とお考えください。もう一度申し上げます。ただ今・・・」

二分後、民放局の女性アナウンサーが、青ざめた表情で速報を伝えはじめた。

「さらに先ほどU国から、救援と邦人保護のため、“緊急支援部隊”を派遣するとの宣言が報道各社に送られてきました。これは、100年前の大地震の際にあった虐殺事件を鑑み、坐国政府に邦人保護を求めたが返答がないための措置だ、と表明しています。」

『・・・おちついて行動してください・・・』

記者が叫んだ。

「ここは！ ここには！ 信頼できるラインがないのか！」

「長官！！ 本当なんですか！！！！」

「長官！ 事実なんですか、長官！」

「オレは聞いてないぞ！！」

「長官！ 現実なんですか、長官！」

長官は党本部から移動中のはずの首相にコンタクトを試みる。だが、直通の暗号電話が通じない。道路交通は渋滞で麻痺し、警察車両でさえ通行がままならない。

真偽も怪しい放送が延々続くかと思われた、その刹那、あらゆるモニターから一斉に音声が消え、そこに発信源不明の音声が入り混じった。ひどい訛りだったが、確かにこう聴き取れた。

TV各局のスクリーン合戦が続く。

『ふ。。 Z a p a n の密は、あまーい密。。さて

『国籍不明の航空機が南西第一原発の2号炉に墜落、炎上しました。今のところ周辺の放射能は・・・』

この国の密を食べ尽くすのは、誰・か・な・』

『中央第一原発が制御不能となり、20km圏内に緊急避難命令が出ました。おちついて行動してください・・・』

・

記者たちが叫んだ。

「ここは！ ここには！ 信頼できるラインがないのか！」

「国土が二分されるぞ！」

「長官！ 現実なんですか、長官！」

TV各局の放送が続く。

『・・・おちついて行動してください・・・』

『・・・おちついて行動してください・・・』